

# 猪間驥一東京帝国大学経済学部追放事件の検証

和田 みき子

はじめに<sup>(1)</sup>

近代日本を代表する思想家、石橋湛山には、「いつも私に良い注意を与えてくれる猪間君<sup>(2)</sup>」という協力者がいた。猪間驥一(1896-1969)は、東京帝国大学(以下、東大)において次々と論文を発表し、将来を嘱望された統計学者であったが、1924年12月、突然、東大を追放された。追放された後、猪間は、石橋から東洋経済新報社の社員向け統計学の講義を依頼され、それが好評だったことから、その内容を『経済図表の見方書き方使い方』として出版した。この本は各界からの評判を呼び、ロングセラーとなる。石橋は、その後も彼に協力を求め、終戦直後、戦前の日本人の海外発展について、正当性を明らかにする歴史の執筆を依頼する<sup>(3)</sup>。本稿は、そもそも東大追放事件が濡れ衣であり、当時のアカデミズムの歪みをもたらしたものであったことを立証しようとするものである。

## 1. 猪間追放事件前の東大経済学部

東京帝国大学法科大学経済学部は、1919年4月に分離独立して経済学部となる。河合栄治郎門下の評論家、江上照彦は、当時の状況を次のように説明する。

東大経済学部独立早々の頃には、高野岩三郎教授のもとに森戸(辰男)、大内(兵衛)、舞出(長五郎)、糸井(靖之)ら若手助教授の俊秀がくつわを並べた陣立だから、この一

門ははなはだ威勢がよい。……もともと経済学部の独立自体がほとんど高野の力で推進しかつ組織したものだから、すでにその声望は学部を圧していたのだ。その高野が……国際労働会議代表就任問題のもつれから大学教授を辞任したから、同門のグループは突然船頭を失った水夫たちさながらのありさまになった。そんなところへ降って湧いたようにして起ったのが例の森戸の筆禍事件なのである<sup>(4)</sup>。

その森戸事件がどのように起ったのかを見ていく。

### 経済学部入学と森戸事件

猪間驥一は1919年9月、東大経済学部で第一期生として入学したが、翌年早々に、日本の社会思想史上に残る、いわゆる森戸事件が起こった。そのことを猪間は次のように書いている。

経済学部がその研究発表機関として華々しく発刊した雑誌『経済学研究』第1号に載せられた森戸辰男助教授の論文「クロボトキンの社会思想」が当局の忌憚に触れて、森戸先生は起訴、休職となり、裁判の結果ついに下獄され、外国留学の途に就かれるばかりになっていた矢先に、東大教授としての前途を失われたのである<sup>(5)</sup>。

森戸事件における猪間らの活躍を伝える新聞

記事が残っている<sup>(6)</sup>。以下、それらの記事より事件の全容をたどる。

1920年1月1日、『経済学研究』創刊号に森戸のクロボトキン論文が掲載される。これを危険思想とする上杉慎吉教授ら右派興国同志会からの訴えで、雑誌は回収処分となり、森戸が休職を命じられる<sup>(7)</sup>。休職決定前の教授会では、森莊三郎、渡辺鏡蔵ら若手教授が「学問の自由」に基づいて反対を訴えた<sup>(8)</sup>。

同14日、森戸と編輯人の大内が起訴され、大内は辞表を提出する<sup>(9)</sup>。同15日、渡辺は、森とともに興国同志会の森戸問題報告会の会場に乗り込んで、「諸君はなぜ自ら自由を失うような処置に出たか」と訴える<sup>(10)</sup>。糸井靖之(助教授)は、「私は森戸君を以て危険思想の鼓吹者と認めぬ」、「若しアアした研究が危険思想の宣伝と認められて起訴されるにおいては学者の研究は総て多少の手加減を要するという事になる」とコメントしている<sup>(11)</sup>。

同16日、猪間驥一、東栄二両学生の呼びかけで、経済学部の学生自治会、経友会<sup>(12)</sup>が、同学部学生500名を集めて学生大会を開き、両者が提出した「吾人は学問の独立を期す」という宣言と、「経済学部教授会および総長の反省を促す」という決議案が満場一致で可決される<sup>(13)</sup>。

同17日、法学部の学生大会で、左派新人会提出の決議案「吾人は経済学部教授会の責任を問う」に対し、修正案「教授会の反省を促す」が出て紛糾する。学生数は経済学部の何倍もありながら、参加者少数の上、原案136：修正案133と僅差であったため、再度学生大会が開かれるが、原案49：修正案56と、一転して修正派が勝利する<sup>(14)</sup>。法学部学生大会における、経済学部教授会への非難について、渡辺は、「学生の容喙を許さぬ、ちと出過ぎた言分」と叱責している<sup>(15)</sup>。

同19日、猪間ら実行委員は、決議案を山川総

長、金井部長に提出<sup>(16)</sup>。同23日、新聞に、「文部省が、世論の紛糾を気づかい、大内の辞表は握りつぶして、目下、形勢を見守っている」という暴露記事が掲載されたのを受けて<sup>(17)</sup>、同24日、経済学部委員と法学部委員が協議会を開き、森戸問題に関する運動をひとまず打ち切りとする<sup>(18)</sup>。

なお、森戸事件はこの後、場所を学外に移し、同30日の第1回公判へと進んでいく。これを受けて、黎明会<sup>(19)</sup>も、森戸がそのメンバーであったことから、新人会と共同で講演会を開くなど組織的に支援活動を行った<sup>(20)</sup>。

ここで確認したいのは、猪間・東が大多数の学生の支持を得て、文部省をも動かした一方で、左派新人会は法学部でも勝利できなかったという事実である。

森戸は後に、猪間らの経済学部学生大会や決議には言及せず、法学部の学生大会で、新人会が提出した「教授会の責任を問う」決議案が、「反省を促す」に変わったことを、学生運動の「早くも一歩後退の兆し」として批判している<sup>(21)</sup>。

大内にも、以下のような発言があるが、猪間や経友会の決議には一切触れていない。

それでいよいよ森戸君と僕は起訴されたんだ。罪名は出版法による朝憲暴乱。……新聞は毎日々々この事件を大々的に報道する。また学内の弾圧反対の学生運動も活発に展開された。……政治科の方では『学問の自由・危機を守れ』というスローガンで学内に演説会がもたれた。その演説会には、今日では右翼になっている渡辺鏡蔵君なんかも、森莊三郎君たちと一緒に学生をアジった。司法省が大学に入ってくるのに屈してはならんというので、非常に学生は熱狂した。しかし、学生の中にはやはり上杉派(七生会)の人も出て、これに対抗し

た。もちろん新人会の方が活発であり、学生の人気もこの方に集まったが、反対派もまた演説会なんかやって氣勢をあげた<sup>(22)</sup>。

大内は、文言の威勢のよさとは裏腹に、森戸裁判の公判を前に、「森戸氏の書いたクロボトキン研究という論文は、自分も不穏当とは思った」、「自分は国家主義の方面からの社会改良論者である」と釈明して<sup>(23)</sup>、罰金刑のみとなっている。そして、大学への復帰の約束を取り付けた上で<sup>(24)</sup>、留学のためハイデルブルクへ向かうのである。

### 糸井靖之と統計学への開眼

1920年秋、猪間は2年生となる。そして、生涯に及ぶ影響を受けることになる糸井靖之に出会う。その演習は「桜の葉っぱ」の話から始まった。

「桜の葉っぱというと、われわれはその色や形を頭の中に描くと同時に、大きさも略々どれ位と連想している。そこで桜の葉っぱを沢山拾って来て、その大きさを1枚1枚正確に測って行くと、特別に大きいものや特別に小さいのは割合少なくて、中ぐらいの大きさのが大多数を占めていることを発見する。我々が桜の葉っぱという時、普通に表象する大きさは、この中位の大きさである。<sup>(25)</sup>」

この話に学問的好奇心を刺激されて、猪間は、統計学にのめり込む。

この講義には、初めは3、40人も聴講者があったけれど、面白くないなどと悪口をいって、1人去り2人去り、2ヵ月の後には、わずか6人になってしまった。6人の者には、白墨の粉と先生の唾と、そしてし

ばしば痛罵をあげせられながら、とうとうおしまいまで辛抱し続けた。辛抱のお駄賃に、われわれはみんな「優」をもらった。——6人の中に、今の東大の統計学正教授有沢広巳君もいた<sup>(26)</sup>。

有沢がここに含まれていたことが、後に起る事件の布石となる。

猪間は経友会の雑誌委員をしていたので、教授側の委員だった糸井と、特に接触する機会が多かった。

先生は……よく青木堂へ私を引っ張りだされた。食卓へ招かれたことも幾度かある。その度ごとに聞かされるのは、何故人間は腹がへった時腹が立つかとか、博奕は如何なる原理に基くかとか、当時やかましかった物価調節問題は、何故貴族院で紛糾し、衆議院で左程ではないかという様な、外の人からは聞けない鋭い観察であった。

ある日私は先生に連れられて日本銀行へ行った。調査局で物価指数の計算の基礎を承合するためだった。……局員の中に先生に対して大変好意を持つ人があって、その計算の台帳を見せて呉れた。……それを写してもいいと言われたので、先生も私も大喜びで、私は先生の帰られた後も残って、一生懸命それを写してしまった。写したものは、家に帰ってもう1部コピーを取り、それは先生に差上げたが、初めの1部だけは、私の手許に大切に蔵って置いた。私が学校を出て、経済学部の機関誌「経済学論集」に出した処女論文は、この時の筆写を資料の一部に使ったものだった<sup>(27)</sup>。

ある時、猪間は、糸井が専門とした商品学について、かねてからの疑問をぶつけてみた。

「先生、一体商品学なんて学問になるんですか？」

この無様な質問に対する先生の答えを、私は今も忘れない。

「そりゃあ君、一つ一つの商品の性質を調べてなど行ったら、人間業で知りつくせるもんじゃない。ただ、あらゆる商品を、人間の欲望の客観化されたものと見る時、何等かの統一の見地ができればいいものさ。しかもその客観化は数量的表現を持つんだからね。それだから僕は先ず統計学をやった訳さ。<sup>(28)</sup>」

しかし、そうした日々は長くは続かなかった。演習は10月に始まり翌年の6月初めには、糸井は留学の途に就く。その出発を東京駅に見送ったのが、糸井の最後の姿だった<sup>(29)</sup>。

猪間は3年生のとき、自由主義者、河合栄治郎の経済学史の講義と演習に出ており、いよいよ卒業するというとき、大学に残るよう勧められる<sup>(30)</sup>。

1922年3月、猪間は東大経済学部を卒業し、4月より、有沢、大森義太郎とともに大学の研究室に残る。ところが、その直後に肋膜炎を患い、約1年半、大学を離れる<sup>(31)</sup>。

1923年9月1日、関東大震災が起これり、10月、大内が留学先より帰国する。やや遅れて、猪間も研究室に復帰している。ただし、河合が前年よりヨーロッパに留学していたため、反マルクス主義の立場をとる土方成美(当時教授)のゼミで助手を務めることになる<sup>(32)</sup>。

なお、河合には、震災で焼け落ちた図書館を復旧すべく、ヨーロッパで蔵書購入の命が下る。このとき、ハイデルベルクにあった糸井の病状は帰国が危ぶまれるほどに悪化しており、一時は危篤が伝えられて、11月、河合が見舞っている<sup>(33)</sup>。

## 2. 猪間追放事件の顛末

### 処女論文の発表と講師就任

研究活動を再開した猪間は、1924年2月、『経済学論集』に「物価指数の理論及実際—Fisher教授著“Making of Index Numbers”の紹介、批評並に我国に於ける物価指数調査の実状—<sup>(34)</sup>」を発表。これは、「フィッシャー説を紹介し多少の批評を試み、さらに東洋経済、ダイヤモンド、日銀等の物価指数を紹介批評した<sup>(35)</sup>」もので、日本で初めて本格的に物価指数を論じたものである。

この論文が高く評価されたことは、同年4月、猪間が、有沢、大森に先んじて講師に昇格し、統計学演習を任じられたことからわかる。

なお、猪間の講師就任は、戦中・戦後の『大衆人名録<sup>(36)</sup>』で確認できるが、猪間著『世界経済図表』(日本評論社、1931年)に添付された『月報』の「著者紹介」には、「大正11年(1922年)東京帝国大学経済学部卒業同学部助手に任命せられ同13年(1924年)4月同学部講師となり統計学演習担任を命ぜられる。<sup>(37)</sup>」とその詳細がある。

学内の文書では、1932年に出版された、『東京帝国大学五十年史;下冊』(以下、『五十年史』)の「教職員の移動」講師欄に、猪間の名と「大正13年5月~14年9月」という任期が記されており<sup>(38)</sup>、『月報』の正しさを裏打ちしている。ところが、奇妙なことに、1924年度・1925年度の『東京帝国大学要覧』(以下、『要覧』)の講師欄に猪間の名前はない。

当時の教授会の様子を、土方は次のように書いている。

この間、経済学部ではつぎつぎ人事問題が発生した。……最初に問題になったのは猪間驥一君の助教授への昇格問題であった。これは大内、河合両君の熱心な反対、

この反対をバックされたのが、矢作(栄蔵)教授であった。これに対して私は積極論であって、長時間論議したが、結局否決された<sup>(39)</sup>。

この証言から、猪間には当初、助教授昇格の話があったことが確認できる。ただ、河合が、大内、矢作とともに、猪間の助教授昇格に反対したという、土方の主張には根拠がない。当時、河合は助教授で、人事を決定する教授会に参加資格がなかったからである<sup>(40)</sup>。つまり、土方には虚証があったことになる。猪間の助教授昇格には、助手としての2年間の任期を全うしていないことがネックとなったことも考えられる。

土方は、引続いて、もう一つの教授会があったことも記している。

次いで大森義太郎君、有沢広巳君、山田盛太郎君というような、後年のマルクシストが相次いで助教授に任命された。何れも、高野(岩三郎)グループの熱心なバックアップによるものであった<sup>(41)</sup>。

竹内は、「マルクス主義には古参教授以上に警戒心をもっており、知識もあった河合栄治郎教授(ママ)が留学中であったことも大森の昇任には幸いしたかもしれない。<sup>(42)</sup>」と書いている。しかし、猪間の助教授昇格同様、河合は、日本にいたとしても、人事を決定する教授会には参加資格がない。

猪間の助教授昇格が否認され、講師昇格が決定した直後に、大内が教授会を動かして強引な人事を敢行する。この2年間、論文を発表していない大森・有沢が、6月、助手から一足飛びに助教授に就任する。つまり、講師の猪間と地位の逆転が起るのである。

ただ、こうした中であって、猪間は研究に専念し、同年9月、『経済学論集』に2作目の論文「米の収穫高と価格との関係<sup>(43)</sup>」を発表する。『東京帝国大学経済学部便覧<sup>(44)</sup>』には1924年度の「授業時間割」が収録されており、猪間は、統計学の演習を、冬学期前期(11月と12月の2ヵ月間)受けもっていたと推察される。

#### 糸井靖之の死と猪間の追放

猪間の演習も終わりに近づいた、1924年12月13日、糸井靖之が留学先のドイツにて客死する。同18日、猪間が、3作目の論文「上等品の価格と下等品の価格—統計に基く価格論の一部の考察—」を撰筆する<sup>(45)</sup>。それを掲載した『経済学論集』は、奥付に日付はないが、12月下旬に発行されたと考えられる。

ところが、それから数日の間に、猪間は東大を追放されるのである<sup>(46)</sup>。25日に始まる冬期休暇に入って招集されたと思われる教授会で、猪間は何らかの疑惑で追及を受け、これを矢原忠雄が擁護したことが、晩年の著書に記されている<sup>(47)</sup>。

猪間が追放された理由は謎である。当時、大学教官人事は、教授だけの議決によって行われ、任免や昇任人事においては3分の2の賛成を必要とした<sup>(48)</sup>。ただ、黄色くなったノートを読むだけの教官の姿は、当時学生であった人々から様々に描写されているので<sup>(49)</sup>、学問業績が乏しいことで免ずることはあり得ない。後に大学で問題となる左翼思想による追放<sup>(50)</sup>でなければ教官としてあるまじき行為、風紀紊乱か剽窃などしかあり得ない。この事件が、糸井逝去の直後に起っていること、講師という身分も剥奪されていること、こうした状況から考えられるのは、猪間の論文が、糸井の受け売り・盗用ではないかという疑惑であろう。

それでは、猪間を追放したのは誰だったのか。猪間の家族によれば、猪間は生前、「有沢に追

放された」とくり返し語っていたという。一方の有沢は、「猪間君は助手時代に病気をされてやめてしまいました<sup>(51)</sup>」と書いている。しかし、有沢の説明は不自然である。猪間の講師就任については、すでに確認済みである。猪間が病に倒れたのは、助手になった直後(1922年7月)のことであり、それで辞めたのであれば、3編の論文が『経済学論集』に掲載された事実が説明できなくなる。

大内が、この頃のことを書いた、興味深い文章がある。

ぼくが日本に帰り着いたのは1923年(大正12年)10月、関東大震災の後であった。……経済学部の研究室では、経済学部再建の意気が盛んであった。というのは、第一は、このとき新しい助手が多数ここに集まって、明日の経済学を担う勢いに燃えていたからである。……まず、猪間驥一君、四方博君、馬場敬治君、土屋喬雄君、有沢広巳君、大森義太郎君、山田盛太郎君、橋爪明男君、そういう人々であった<sup>(52)</sup>。

猪間が、助手として率先して研究に取り組んでいたことが、この記述からもわかる。

なお、日本で猪間の追放劇が進行していた頃、河合は、レーデラー後任の教師探しの命を受け、ドイツ、オーストリアに滞在していた。さらに、糸井の死後、ハイデルベルクを訪れて遺骨に花を手向け、遺物の整理を行っている<sup>(53)</sup>。

1925年2月、糸井の遺骨が日本に戻り、青山斎場にて葬儀がとり行われる<sup>(54)</sup>。

### 3. 猪間追放事件の真相

猪間追放の理由として、剽窃が疑われたのではないかというヒントが、『経友』第6号の「糸井助教授を悼む」特集号(1925年3月発行)にあ

る。そこには、山崎覚次郎、矢内原忠雄、大内兵衛、有沢広巳らとともに猪間の名前が並んでいる。大内が追悼文の末尾に日付(1924年12月24日)を記しているが、猪間も、追放前に寄稿したと考えるべきであろう。

#### 猪間の追悼文「糸井先生の思出」

ここでは、前述の「桜の葉っぱ」のエピソードに続けて、教室の外で、糸井とともに過ごした日々がつづられている。

『『経友』の雑誌委員として、先生と私はいつも一所だった』と猪間は書く。第2号の編集を担当し、誰も書いてくれない原稿を、「あっちこっち友達に頭を下げて頼み回り、河津先生には、論文と雑録と二つもお願ひした」のに足りず、「自分も二つ三つ書いた」のに、やはり、「どうしても頁が足りない」。すると、「糸井先生(は)、よし俺が引受けてやろうと云って、たった一晩の中に、ポアンカレの「空間の相対性」と云う難しい20頁からの論文を翻訳して来て下さった」のである。雑誌の編集が終わった極寒の日には、「御苦労だったね、今日は慰労に一つ奢ろう」と声をかけられ、青木堂で紅茶を飲みながら何時間もその話に耳を傾け、大学へ戻ってまた研究室と図書館の間の霜道を往復しながら、語り続けたというのである<sup>(55)</sup>。

こうした二人の姿は学内の人々の目にとまっていたであろう。そこには、猪間が、糸井の後継者と考えられてもおかしくない状況があったと同時に、糸井の経済思想を知り尽した人間と見なされるような状況が生れていたことも思わせる。

なお、この追悼文は、この編集に苦勞した話は除かれているものの、戦後、『統計』(1952年1月号)に寄稿され、後に『人生の渡し場』(三茅書房、1957年)に収録された。

#### 大内の追悼文「糸井君を憶う」

大内がここで強調するのは、糸井と自分が、

滞在先のヨーロッパにあって、いかに親密な時間を過ごしたかということである。しかし、だからこそ違和感があるのは、糸井が亡くなる前の1年間の没交渉である。1923年夏、大内は、糸井とフランスを旅した後、イギリスに渡るが、糸井が体の不調を訴えてきたにもかかわらず、ドイツには戻らず、アメリカに向かい、関東大震災発生ニュースを聞くと、直ちに帰国する<sup>(56)</sup>。

糸井は、前述のように、その後、危篤と小康状態をくり返すので、大内は、当地を訪ねることはできなくても、手紙を書いたり、ベルリンにいた向坂逸郎に見舞いを頼んだりできたはずである。ところが、終戦直後、『旧師旧友』(岩波書店、1948年)に収録された、「彼のこと—糸井君を憶う—」を読むと、大内は、看護人からの手紙で病状を知るのみであった<sup>(57)</sup>。大内の関心は、糸井より、大学内での地歩を固めることにあったのだろう。

#### 有沢の追悼文「糸井先生と私」

有沢の追悼文には、1921年春、糸井が演習の参加者で行った読書会の描写がある。

春に入ると共に私達の演習も終りを告げた。だが……私たちは再び先生を中心として名もなき研究会といったものを拵えた。互に熟読した書物とか論文とかを隔週に皆が集っては、紹介及び批評し合うことになっていた。先ず先生が最初にフィッシャーの物価指数の議論を紹介及び批評せられた。これからの経済学上の仕事は完全なる物価指数作成法の発見にあると、よく話していられたから、先生のこの方面に於ける研究は先生にとって相当の点まで進んでいたことと思われる。フィッシャーに就いての批評にしても、難しい数学の分りっこのない私達にも十分に納得のゆくほど鮮かなものであった<sup>(58)</sup>。

つまり、有沢は、糸井が読書会において、フィッシャーが物価指数を論じた、“Making of Index Numbers”(以下、「物価指数」論文)を読み、紹介及び批評し合っていたというのである。猪間の処女論文のタイトルが、「物価指数の理論及実際—Fisher教授著“Making of Index Numbers”の紹介、批評並に我国に於ける物価指数調査の実状—」であることを知る者には、これが、猪間が糸井の説を剽窃したといわんばかりの文面に受け取れる。ところが、糸井が、この論文について紹介や批評をするのは、物理的に不可能である。なぜなら、糸井が読書会を行っていたのは1921年春、フィッシャーが「物価指数」論文を雑誌に寄稿したのは1922年だからである。

猪間が前書きに、「Fisherは1920年12月米国家統計学会の大会に於て物価指数に関する新説を発表した。其の際の草稿を敷衍したものが、此処に紹介せんとする“Making of Index Numbers”である。<sup>(59)</sup>」と書いているのを読んで、有沢が、この偽証を思いついたことも考えられるが、糸井が新説の内容を類推できたとしても、「百数十の物価指数式に就き一々煩雑な計算をし、其の精密な図表を作成して実証的な研究を試みている<sup>(60)</sup>」論文を、ペーパーなしの想像力で紹介・批評することが可能だろうか。

なお、有沢の追悼文は、終戦直後、『経済政策ノート』(学風書院、1949年)に収録されている。

#### 4. 糸井はフィッシャーを批判したのか

郡菊之助(名古屋高等商業学校教授)は、『物価指数論』(1928年)の中で、フィッシャーの「物価指数」論文について、「本邦に於て此書の要点は既に猪間教授に依って経済学論集第2巻第3号に紹介批評せられ……たのは、此種の問題に興味を有する人々に取っての福音と云わねば

ならぬ。<sup>(61)</sup>」と書いている。

猪間論文が、この研究の先駆けと認識されていたことが、ここで確認できる。ただし、郡のこの評価は、フィッシャーの主張を猪間の主張と混同した上での評価であった。猪間は、郡の誤読に対して、土方成美が主宰する『経済研究』に、「郡菊之助教授著『物価指数論』を評す」を書いて不快感をあらわにしている。

私自身の文章の引用に於て、教授は可なり不注意な事をして下された。……これでは私がフィッシャーと同説としか見えない。……単にフィッシャーの説を噛み砕いて説明したものを、私の説の様に引用されるのは甚だ心外で、而もそれが私の心服する説ならば兎も角も、要素転逆(ママ)試験に関しては、私はフィッシャーの説を信ぜず、彼の独断に過ぎないと、一の攻撃点としているものである。斯ういった引用方法は私にとっては不本意至極である<sup>(62)</sup>。

それでは、糸井は、猪間のようなフィッシャー批判を、読書会で行ってたのか。

糸井は、1917年に助手、1919年に助教授に就任しているが、「著書は無い。ケムメラーの「物価決定の法則」を他の人と共訳されたのが、先生を記念すべき唯一の書籍であり、大正8、9年(1919-20年<sup>(63)</sup>)頃の国家学会雑誌に、物価問題に関する数個の紹介論文のあるのが、わずかに先生を偲ぶ文章ということになる。<sup>(64)</sup>」

糸井が大田信吉と共訳した、そのケムメラー著『物価決定の法則』の例言には次のようにある。

貨幣数量説に関する研究の中、此書以後に現われたものにして注目すべきものは少くない。フィッシャー教授の『貨幣の購買

力』の如き其の尤なるものであろう。けれども其研究方法に於てはケムメラー教授と殆んど同様であり、其の結論に於ても類似した処が少くない。フィッシャーの膨大な研究は此150頁の小冊子の中に纏められて居ると言っても過言ではない<sup>(65)</sup>。

1921年春、読書会は、慌ただしさの中で開かれていた。こんなとき、フィッシャーに敬意を払ってきた糸井が、万が一、フィッシャーが米国統計学会の大会で発表した新説の内容が一部伝わったとしても、十分に検討することなく批判するなどありうるだろうか。

留学時代の糸井について、大内は次のように書いている。

現に彼は多くのアルバイト(研究)に着手していた。中でも物価指数に対する彼の意見をまとめること、純実証的な学問の方法論を打ち立てること、商品学を統計的に作り上げること、日本の賭博に関するプロバビリティーの計算をまとめること、そういうことが10年来常に彼の頭を占領していたことであり、可なり具体的に醸成されていたところであった<sup>(66)</sup>。

ところが、1922年、フィッシャー「物価指数」論文が出版され、翌年から毎週、フィッシャーが物価指数を発表していたこの時期に、糸井が何らかの反応を示した形跡はない。

戦後になって、有沢は1921年春のことを次のように書いている。

先生の発案で、われわれ6人の学生と一緒に、先生が出発されるまでの間、読書会をやろうということになった。……先生は、ミッチェルの『ビジネス・サイクルス』と



かつガン・バラノヴスキーの『イギリス恐慌史論』とか、アーヴィング・フィッシャーの『貨幣の購買力』などをあげて、それぞれ各自で分担して、それを読んで報告することにきまった<sup>(67)</sup>。

奇妙なことに、最初に読んだはずのフィッシャー「物価指数」論文は、紹介や批評ということばもろともどこかへ消えている。読書会で実際に読んだのは、1911年発刊の原著または1913年に邦訳された『貨幣の購買力』(The Purchasing Power of Money)以外にあり得なかったのである。

有沢の矛盾した証言の背景には、いつ助教授になって統計学を担当してもおかしくない猪間に対する焦りがあったことが考えられる。この焦りとは、猪間の統計学者としての能力のみならず、前述の森戸事件で示された学生を組織する運動家としての能力があり、かつ、左派ではなく、自由主義者だったということにより増幅されたものではないか。

土方は、「有沢広巳君は、もともと統計学にそれほど興味を持っているように見受けられなかったが、統計学以外の科目では教授になる望みが薄かった。<sup>(68)</sup>」と書いている。猪間が糸井の後を継いだら、有沢に残された椅子はなかったということであろう。

それでは、有沢は、いつ統計学講座の専任となったのか。

前述の『経済政策ノート』の「経歴」欄に、有沢は、「大正14(1925)年6月、留学中の糸井助教授客死のあとをうけて統計学講座を担当。」と記している<sup>(69)</sup>。ところが、この日付は、東大の公的文書である、『五十年史』とも『要覧』とも食い違っているのである。

『五十年史』の「統計学講座」欄には、1919年4月1日から10月28日まで、高野教授が担任

し、約6年間の空白の後、有沢がこれを担任したのは、1925年8月21日と記されている。これが正式の記録であろう。一方の『要覧』では、有沢が「統計学・統計学講座担任」となるのは1924年度である。有沢門下の中村隆英が、以下の興味深い証言をしている。

糸井先生がドイツに留学されていて留学中にお亡くなりになったということがございまして、それで当時、経済学の助手であった有澤先生が糸井先生の弟子であったということで、急遽、経済学をやめて統計学の担当ということになったわけです。そういうことだったと伺っております<sup>(70)</sup>。

『要覧』が、猪間の痕跡を消すための帳尻合せを行ったとすると、「1925年6月」という日付は、有沢が、『五十年史』との距離を狭めようとして新たに作り出したものかもしれない。

## 5. 猪間追放事件の行方

### 石橋湛山との出会い

1924年暮れ、大学を去ることになった猪間を、『東洋経済新報』の主幹に就任したばかりの石橋湛山が訪れ、社員向け統計学の講義を依頼する<sup>(71)</sup>。講義は、1925年1月から3月にかけて4回行なわれるが、これは、猪間が東大で行っていた演習を、そのまま引き継ぐ形になった。さらに、9ヵ月に及ぶ誌上連載「図表と其の応用」がこれに続く。そして、翌1926年5月、この連載は、『経済図表の見方画き方使い方』として出版される。同時に、猪間の作製による日本初の片対数方眼用紙が発売される<sup>(72)</sup>。

このとき、広告に記された猪間の肩書きが興味深い。発売前は、「東京市政調査会副参事・経済学士」であったが、発売後には、なぜか「前東大経済学部助教授・経済学士」となり、その

後、「前東京帝国大学経済学部講師・現東京市政調査会副参事」に訂正されている<sup>(73)</sup>。濡れ衣による猪間の東大追放の痕跡を、石橋があえて残そうとした可能性もある。なお、新聞にも一度広告が打たれているが、そこでの肩書きは、「元東大経済学部講師・東京市政調査会副参事・経済学士」であった<sup>(74)</sup>。

### 『経済図表の見方画き方使い方』の反響

『経済図表の見方画き方使い方』初版は大きな評判を呼び、「諸方面から懇篤な激励の辞を賜った。」中でも、「名古屋高等商業学校教授郡菊之助氏と関西学院教授田村市郎氏とは、専門雑誌々上で詳細なる批評の言を与えられた。」1928年8月には、早くも再販の運びとなるが、そのとき、「両教授に対する答弁は、特に読者の参考となり、著者の立場の闡明に役立つ事多きを思い」巻頭に掲げている<sup>(75)</sup>。

このいずれの答弁にも、糸井が編み出した、統計図表を変数の数により分類する「3分法」がかかっている。

「郡教授の批評に対する答弁」では、3分法に固守する合理的な理由の他に感情的な理由があることを吐露する。猪間が持ち出してきたのは、何と、この分類法が、「糸井靖之助教授の講義からヒントを得て試みた」ものであるからだというのである。

糸井教授はまことに人の寝鎮まれる暗夜の流星の如くに此の世に出現し消え去った人であった。その光芒を見た人は少く、世を去った跡に遺影の何等徴すべきものも無い。従ってその学識才量を人に知らしめる道も無いが、今先生にしてなお在すならば我が経済学界統計学界の一方の雄として闊歩されたであろう事は、著者の信じて疑い得ない所である。先生の講義というのは、……聴講者は結局只の6名、講義時間は通

計8、9時間を出でなかったろう。そのうち図表に関する話は、1時間は無かったかと覚える。斯様に僅少の時間なるに拘らず、その講義は聴講者に深い深い印象を止めたのであった。その先生のかたみと思えば、著者には此の統計図表の分類法が何となくなつかしく、捨て難く思われて、出来るだけ之を支持して見たいとの念願を禁じ得ないのである<sup>(76)</sup>。

「田村教授の批評と之に対する答弁」は、田村の「統計図表の3分法が糸井助教授の独創に係るものでなく、他より学ばれたものではないか」という疑問に答えたもので、以下のように要約される。

猪間の著書が刊行される約半年前の1925年11月、米国で、『統計的解析法』という統計学書がミシガン大学のデー教授によって著された(Prof. E. E. Day, Statistical Analysis, 1925.)。しかし、その半年前、猪間の『東洋経済新報』誌上連載は始まっている。そこで田村は、糸井が米国に留学してデーに接触したのではないかと考える。ところが、猪間は「同じ様な事を考えてる人が海外にある事を知って大いに愉快を感じると共に、迂闊に同書を見過していた怠慢を警められて赤面した次第で」、著書は読んでおらず、糸井が、自分が演習を受けたときまで、「北支那及び満州の外には海外へ出られた事無く、米国には遂に足一歩をも踏み入れずに生を終られた」と証言する。そして、「私は少くとも統計学界に於ては、糸井助教授が斯の如き分類の創始者たるを信じているものである。」と結ぶのである<sup>(77)</sup>。

ここには、論文のオリジナリティについての猪間の考え方が如実に示されていると同時に、学問上の誠実さ、師の業績への深い敬慕の念が現われている。このような人間が、果して、剽

窃など卑劣な行為を成し得るだろうか。

猪間は、1925年7月、東京市政調査会の研究員となる。

わたくしは学校を出て就職した東大経済学部を追われて、大正14年にこの財団法人東京市政調査会に救われて、昭和13年まで14年間そこにいた。月給は入った時は東大助教授と同じ130円をもらったが、出る時は205円だった。経済的にはまったく恵まれなかったが、政府の金で抱えられているのではない。この国のおしひしがれている民主主義政治、地方財政経済の基礎に考察を進めて行かれる地位は、世にかえりみられなくても、わたくしにはまたとない誇りを与えた<sup>(78)</sup>。

月給が「東大助教授と同じ」というところに、市政調査会側の配慮が感じられる。

なお、猪間は1928年、日本評論社の『社会経済体系』に、「経済統計」を寄稿しているが、「フィッシャーの物価指数論は、従来提唱された指数算式を一の統一的見地から系統立てたという賞賛を与えらるべく、その説く所も甚だ巧妙である。けれども算式優劣の標準たるべき試験法中、要素転逆(ママ)試験の意義には疑問が存するし、又可なり重要と思われる試験方法を抜かしている。<sup>(79)</sup>」と批判的な立場を変えていない。

#### 河合栄治郎のクーデター

猪間が東大を去った後、猪間追放事件は闇に葬られるかに思われた。

ところが、1925年8月、河合が、イギリス留学を終えて帰国後、状況が変化する。河合は、土方成美を訪ね、学部の内情を聞く。さらに、山崎覚次郎を訪ね、彼が「研究室のパーティ(共産党グループ<sup>(80)</sup>)を少し注意している」ことを

知る。大森が来て、大学内部のことを話す。事件が話題に上ったことは間違いのないであろう。11月、大森、有沢と午餐を共にし、12月には、猪間を含む第一高等学校出身者が集まって会食している<sup>(81)</sup>。

翌1926年2月、河合は教授に就任する。そして3月2日、ついに「クーデター」が起る<sup>(82)</sup>。この日開かれた教授会で、河合が、「研究室主任として重要な人事を矢作先生と一緒にあって独断専行したということ」で大内を攻撃し、大内は任期半ばにして研究室主任を辞めさせられることになる。そして、経済学部独立の立役者の一人でもある、渡辺鍊蔵教授が大内に代って、新しく出来上った研究室の主任となる<sup>(83)</sup>。

ここでいう「重要な人事」が、大森と有沢らの助教授就任を指しているのはもちろん、猪間の東大追放が含まれていることは明らかであろう。さらに注意すべきは、河合日記の次の記述である。

教授会を終えてから、土方(成美)と二人で安田講堂を巡り、それから上野の森を夕方暗くなるまで話をした。話題は多岐に亘ったが、頭に残るのは助教授の中に大したものがないこと、グルッベ<sup>(84)</sup>が大失敗をやったこと、これから主なる潮流を作って置かなくてはならないこと、それに僕を推したことなどであった。……唯物史観、暴力革命反対の運動を大学内に於て起こすことに付いては非常に共鳴したようである。……ともかく今日の話でグルッベの氣勢は挫かれた<sup>(85)</sup>。

河合と土方が意気投合して、新たな動きを作ろうとしていたことがわかる。研究室主任となった渡辺は、しかし、その1年後、東京商工会議所の理事となって東大を辞める。

1931年 3月、三・一五事件が起り、治安維持法違反容疑で社会主義者、共産主義者が一斉検挙される。東大評議会でも、新人会の解散が決定され、大森義太郎の進退問題が協議されるが、大森は先手を打って辞表を提出する。

そして、その数年後の1936年を境に、派閥抗争が転機を迎える。竹内は、この間の事情を以下のように説明している。

河合栄治郎は多数派を背景に学部長に就任した。しかし、河合の独断専行ぶりが多数派内部の亀裂をもたらす。土方成美や本位田祥男などは河合の突出をうとましくおもいはじめる。いまや多数派と少数派ではなく、多数派が土方派と河合派に分裂し、大内兵衛を首領とする少数派とで、3派鼎立状態となった。経済学部の派閥病は病膏肓に入る<sup>(86)</sup>。

1937年、人民戦線結成を企てたとして、日本無産党の関係者ら400余名が検挙され、翌1938年には、大内、有沢らも検挙される。一方、河合と土方との間に生じた対立が、河合の著書発禁処分を機に激化したのに対し、1939年、平賀総長が、両者に休職処分を申し渡し、それを不服とする両派の教授多数が辞表を提出した(平賀肅学)。

猪間は、「河合先生の悲劇は、力をこめて左翼思想を排撃されつつある間に、いつか右翼から攻撃を受けられることになり、遂に学界の表面から身を退かれねばならなくなった事に於いて、頂点に達した訳である。<sup>(87)</sup>」と書いている。

#### おわりに —東大が失ったもの—

1969年 4月、猪間は永眠する。同年、東京大学経済学部は50周年を迎えるが、紛争の影響か、1976年になってようやく、『東京大学経済学部

五十年史』は刊行される。ここで、事件はどのように処理されたのか。

「資料編」の部には、猪間が助手だった期間が1924年 5月31日まで、有沢と大森は同年 6月 9日までと記されている<sup>(88)</sup>。戦前の『東京帝国大学五十年史』とすり合わせると、猪間が正式に講師に就任した日を、助手のまま辞任した日としたことがわかる。

「東京大学経済学部概史」の部では、猪間が一時期、非常勤講師をしていたことになっている<sup>(89)</sup>。講師として統計学演習を担当した事実を、非常勤講師と置き換え、辻褃を合せてのではないか。

「座談・対談編」の部では、助教授になるための条件について、当時は就職論文の提出が必須ではなかったことが強調され、助教授になった後、山田盛太郎と大森が書いた論文が「天下を驚かせた」と評して、大内は人事を正当化している<sup>(90)</sup>。

なお、大森の論文とは、「デボーリンのカント批評<sup>(91)</sup>」を指しているが、デボーリンの「(カントは、)戦争が、私有財産に基礎を置く市民的社会の避けえない帰結であることを理解しなかった。」という批判、あるいは、デボーリンのカント批評が学術的であることを指摘した後行った、「マルクスを読まずにマルクス批評を敢行する反マルクス主義の学者達のために、特に注意しておこう。」という批判<sup>(92)</sup>が、この当時の、「マルクス旋風が全国を風靡する<sup>(93)</sup>」状況下では、特に歓迎されたということであろうか。

ここでカントの理解とは『永遠平和のために<sup>(94)</sup>』のことを指しているが、要するに、君主は戦争が自分にとってたいしたことではないから戦争をする。自分が戦争で死ぬか戦争のために重税を課せられる立場にあるものは戦争をしない。だから、市民が戦争に責任を負う政府ができれば

ば戦争にならないはずだというものである。この主張に不備があるという批判は可能だろうが、私有財産を廃棄すれば戦争はなくなるという主張は、私有財産を廃棄したはずのソ連や中国が度々戦争を仕掛けていることからしても全くの誤りである<sup>(95)</sup>。

猪間追放事件を闇に葬ったことで、大内、有沢らのアカデミズム支配は成功したかに見える。しかし、彼らが失ったものはなかったのか。

1920年代後半以降の猪間の日本統計学への貢献、あるいは東京市政調査会における調査研究、また東京商科大学(現一橋大学)の上田貞次郎らとともに行った人口問題研究の成果を見れば、それは明らかであろう<sup>(96)</sup>。一方の東大はどうだったのか。最新の統計学には触れず、統計学史を中心にした有沢の講義案<sup>(97)</sup>が残っているが、その傾向は戦後も続いたようである<sup>(98)</sup>。

さらに、もし猪間の助教授承認人事、その後の有沢等の昇任人事において、論文で昇格を決めるという業績主義が確立していれば、人事抗争は、また違う様相を見せたのではないか。竹内洋の『大学という病』を読んで驚くことは、人事を行う教授たちに、何が昇任に値する学問的業績なのかという問題意識がまったくないことである。業績主義という理念があれば、学問の自由を弾圧する権力に対し、大学が一致して対抗する理念が成立し得たのではないだろうか。

本稿の執筆にあたっては、構想の段階から、日本銀行政策審議委員(現名古屋商科大学ビジネススクール教授)原田泰氏より有益なご助言をいただいた。ここに心よりの謝意を表したい。残る誤りは筆者の責任である。

#### 【注】

- (1) この事件を扱った先行研究として、和田みき子「1924年の猪間驥一東京帝国大学経済学部追放事件」『明治学院大学大学院社会学研究科

社会学専攻紀要』第41号(2018年3月)があるが、これは東京大学経済学部創立100周年を前に闇に葬られた事件に光を当てようとしたもので、背景等の論証が不十分であり、今回の論考には基本的アイデア以外ほとんど残っていない。

- (2) 石橋湛山「続若干の回想(2)：重ねて幣原さんとデニソン氏について」『石橋湛山全集』第13巻(東洋経済新報社、1970年)534頁
- (3) その報告書、『日本人の海外活動に関する歴史的調査』については、原田泰・和田みき子「石橋湛山の昭和恐慌理解」『自由思想』第142号(2016年8月)参照。
- (4) 江上照彦『河合栄治郎伝』全集別巻(社会思想社、1970年)113頁
- (5) 猪間驥一『折り鶴の旅』(私家版、1962年)195頁
- (6) 神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ新聞記事文庫：<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/>
- (7) 『大阪毎日新聞』1920年1月11日、『大阪朝日新聞』同年1月14日
- (8) 『大正日日新聞』1920年1月14日
- (9) 『読売新聞』1920年1月15日
- (10) 『大阪毎日』1920年1月16日
- (11) 『神戸又新日報』1920年1月16日
- (12) 経友会とは、経済学部学生全員が加盟する学生自治団体。右派の興国同志会、左派の新人会とはその点で異なる。
- (13) 『東京日日新聞』1920年1月16日、『大阪毎日』1920年1月17日
- (14) 『大正日日』1920年1月18日、『東京日日』1920年1月19日
- (15) 『国民新聞』1920年1月19日
- (16) 『大正日日』1920年1月21日
- (17) 『報知新聞』1920年1月23日
- (18) 『大正日日』1920年1月25日
- (19) 黎明会・黎明運動とは、1918年12月末、吉野作造、福田徳三、渡辺鏡蔵らによって設立された、軍国主義者に対抗する運動で、軍備制限、国際連盟に協力、軍人の政治関与排除等を主張した(渡辺鏡蔵『反戦反共四十年』(自由アジア社、1956年)1頁)。
- (20) ただし、渡辺は、クロボトキンの論文「パンの奪取」については、「(共産主義思想と同様)蜂か蟻かの哲学であって人間の哲学では無い。(渡辺鏡蔵『経済政策要論』(清水書店、1924

- 年)268頁)」と批判している。戦後に発表した、「蟻の一穴から洪水」(『激動の日本』(自由アジア社、1968年)に収録)では、「このような幼稚なクロボトキンの論文の翻訳を刑事問題にまで発展せしめたことは、東大新人会の発展と共に、若い人々の赤化思想に拍車をかけ」、「東大経済学部の教授間の思想的対立は、マルクス学派と反マルクス学派の正面对立となり……」、それは、「森戸事件に始まる蟻の一穴より洪水が起ったような有様である」と論じた(同上449-452頁)。
- (21) 森戸辰男『思想の遍歴(上):クロボトキン事件前後』(春秋社、1972年)109頁
- (22) 大内兵衛『私の履歴書』(黄土社書店、1951年)166頁
- (23) 『新愛知』1920年1月23日
- (24) 「公判がはじまって2週間経つか経たぬうちに、事件着落後の森戸・大内の身のふり方に関する動きが出てきました。まず大内君については、たまたま「編集人」の立場にあったために起訴されたという事情から、特に同情をあつめ、労資協調会から招聘されたとか、実業方面に転職するとかの噂も出たらしい。けれども、本人の希望もあって、大学復帰が進められていました。」(森戸前掲書143-144頁)
- (25) 猪間驥一『人生の渡し場』(三芽書房、1957年)190頁
- (26) 同上190-191頁
- (27) 同上191-192頁
- (28) 同上193頁
- (29) 同上
- (30) 猪間驥一、吉田忠雄「計算外の人生(対談)」『社会思想研究』第19巻第5号(1967年)6頁
- (31) 猪間『人生の渡し場』155-156頁
- (32) 猪間、吉田前掲対談3-6頁
- (33) 社会思想研究会編『河合栄治郎全集』第22巻「日記I」(社会思想社、1969年)103頁
- (34) 猪間驥一「物価指数の理論及実際—Fisher教授著〈Making of Index Numbers〉の紹介、批評並に我国に於ける物価指数調査の実状—」『経済学論集』第2巻第3号(1924年2月)
- (35) 猪間驥一「郡菊之助教授著『物価指数論』を評す」『経済研究』第5巻第3号(1928年7月)632頁
- (36) 『大衆人事録』第14版(帝国秘密探偵社、1943年)、『大衆人事録』第19版(帝国秘密探偵社、1957年)
- (37) 『現代経済学月報』第26号(日本評論社、1931年5月)
- (38) 東京帝国大学編『東京帝国大学五十年史;下冊』(1932年)1091頁
- (39) 土方成美『事件は遠くなりにけり』(経済往来社、1965年)107頁
- (40) 竹内洋『大学という病—東大紛擾と教授群像』(中公叢書、2001年)62-63頁
- (41) 土方前掲書107頁
- (42) 竹内前掲書53頁
- (43) 猪間驥一「米の収穫高と価格との関係」『経済学論集』第3巻第2号(1924年9月)
- (44) 東京帝国大学経済学部編『東京帝国大学経済学部便覧』(東京帝国大学、1924年4月)
- (45) 猪間驥一「上等品の価格と下等品の価格—統計に基づく価格論の一部の考察—」『経済学論集』第3巻第3号(1924年12月)681頁
- (46) 猪間驥一「わたくしの東京(6)」『統計』第8巻第7号(1956年)59頁
- (47) 「30何年か前、東大を去らねばならなかった時、私は在職中のお礼に、最も私を弁護して下さった一人である先生(矢内原忠雄)のお宅へ伺った。」(猪間驥一『折り鶴の旅』(私家版、1962年)256頁)
- (48) 竹内前掲書62-63頁
- (49) 同上27-55頁
- (50) 同上12-26頁
- (51) 有沢広巳『学問と思想と人間と』(東京大学出版会、1957年)36頁
- (52) 大内兵衛『経済学五十年』(東京大学出版会、1960年)147-148頁
- (53) 社会思想研究会前掲書168-170頁
- (54) 『東京朝日新聞』1925年2月19日
- (55) 猪間驥一「糸井先生の思出」『経友』第6号(1925年3月)15-16頁
- (56) 大内兵衛「糸井君を憶う」『経友』第6号(1925年3月)2-4頁
- (57) 大内兵衛『旧師旧友』(岩波書店、1948年)132頁
- (58) 有沢広巳「糸井先生と私」『経友』第6号(1925年3月)12-13頁
- (59) 猪間驥一「上等品の価格と下等品の価格—統計に基づく価格論の一部の考察—」『経済学論集』第3巻第3号(1924年12月)580頁
- (60) 同上

猪間驥一東京帝国大学経済学部追放事件の検証

- (61) 郡菊之助『物価指数論』(同文館、1928年)31頁
- (62) 猪間「郡菊之助『物価指数論』を評す」632頁
- (63) 「1918-19年頃」の間違い。
- (64) 猪間『人生の渡し場』194頁
- (65) ケムメラ、糸井靖之・大田信吉共訳『物価決定の法則』(内田老鶴圃、1921年)Ⅲ-Ⅳ頁
- (66) 大内『旧師旧友』139頁
- (67) 有沢『学問と思想と人間と』25-27頁
- (68) 土方前掲書108頁
- (69) 有沢『経済政策ノート』282頁
- (70) 中村隆英「大内先生と日本の統計」『研究所報』第37号(法政大学日本統計学研究所2007年4月)8頁
- (71) 猪間『人生の渡し場』107頁
- (72) 猪間は、「此の図表(片対数方眼紙)は私が東京帝国大学経済学部研究室に奉職中必要の為製版印刷して貰ったが、東洋経済新報社ではそれと同じものを此の度作製し、実費を以て頒布するそうである。『東洋経済新報』1925年11月21日)」と書いている。
- (73) 1925年4～8月、『東洋経済新報』に掲載された広告中の文言である。
- (74) 『東京朝日新聞』1925年8月2日
- (75) 猪間驥一『経済図表の見方書き方使ひ方;再販』(東洋経済新報社、1928年)(初版は1926年)14頁
- (76) 同上25-27頁
- (77) 同上27-31頁
- (78) 猪間「わたくしの東京(6)」59頁
- (79) 猪間驥一「経済統計(第2回)」『社会経済体系』第17巻(日本評論社、1928年)345頁
- (80) 大内グループを指す一種の隠語であり、共産党のメンバーではない。
- (81) 社会思想研究会前掲書200-209頁
- (82) 新任教授にすぎない河合に「クーデター」ができたのは、帰国後、土方や山崎に会って、支持を取りつけていたこと、また、留学前、矢作とは結婚式の仲人をお願いするなど良好な関係が築かれており、関係の修復は難しくないとの見込みがあったためと思われる。渡辺を研究室主任にする案は、教授会を前にして、土方から出されたようであるが、河合は、「異論はないが、余り早く定め過ぎはしまいか、延期するようにしたいもの」と考えていた(社会思想研究会前掲書214頁)。
- (83) 東京大学経済学部編『東京大学経済学部五十年史』(東京大学出版会、1976年)648頁
- (84) パルタイに同じ、大内グループを指す。大失敗とは一連の企みの発覚と思われる。
- (85) 社会思想研究会前掲書214-215頁
- (86) 竹内前掲書161頁
- (87) 猪間『人生の渡し場』205頁
- (88) 東京大学前掲書1080頁
- (89) 同上651頁
- (90) 同上654-655頁
- (91) 大森義太郎「デボーリンのカント批評」『経済学論集』第5巻第1号(1926年6月)
- (92) 同上131頁
- (93) 渡辺鏡蔵『激動の日本』(自由アジア社、1968年)451頁
- (94) カント、宇都宮芳明訳『永遠平和のために』(岩波文庫、1985年)
- (95) なお、当時の学術論文の多くは海外文献の紹介に過ぎない。あれだけ話題になったクロボトキン論文も、前述のように、紹介と批評である。大森の論文も紹介に過ぎない部分が多いが、それが当時の論文としては通常のことであったことを指摘しておきたい。
- (96) これらの業績については、和田みき子『猪間驥一評伝』(原人舎、2013年)参照。
- (97) 有沢広巳『統計学講義案』(明善社、1934年)参照。
- (98) 「有澤先生は、……どうも統計をやるのはあまり好きではなかったようです。……統計学の講義では、統計のいろいろな細かい問題には触れられず、統計学説史を中心とした話にされていました。」(中村前掲講演録8頁)